

一生懸命生きている。

小生は猫をよく拾ってくる。どれも雑種である。一番最近拾った猫は、生まれてから半年ばかりになった三毛猫である。ご承知の方も多いと思われるけれども、三毛猫にオスはいない。オスとされているのは実は中性で、生殖能力を持っていない。この種は古来、天候を予知するといわれており、航海をする船乗りから大切にされてきた。きわめてまれな種である。したがって小生が拾ったのも当然メスである。子ネコの可愛い時期が過ぎて、これから不妊の治療などに、お金がかかるから捨てられてしまったのだろう。人にはよくなついていた。それでついこれを拾ってきたと言うわけである(花の縁 03-05-12 猫じゃらし)。

★ ★ ★ ★ ★

小生は最近サクラの繁殖に凝っている。日本のサクラはせいぜい百数十種類程度しか分布しないと思われるが、多くのものは山桜の美しいものを増やして、奈良時代から栽培しているもので、自然界にはこの山桜でひときわ美しいものが数多い。小生が美しいと思っているのは山桜の中でも、ひときわ色が濃いもので、天然記念物に指定されているものも少なくない。ではなぜ色の濃いサクラが野山で誕生するかといえば、沖縄には『寒緋桜』という赤紫色の濃いサクラがかなり広く自生し、2月頃に開花する。この花粉が折からの南風に乗って北へ運ばれ、ちょうど4月頃に日本の各地に到達、ここで既存の山桜に受粉して、やがて色の濃い桜として新しい種が誕生するというのがその理由である。そこには自然界の壮大なロマンが隠されているというわけだ。

★ ★ ★ ★ ★

昨年春、小生は長野市の北部、飯綱町にある県と町の天然記念物に指定されている『地蔵久保の大山桜』の穂木を貰い受けた。一般的には天然記念物に指定されている植物の枝葉は、法律では切ってはいけないことになっているのだが、このサクラは最近いたみがひどく、後世に継承木を残すべきだと思い、町や県としぶとく交渉を続けた結果、何とか入手できる運びとなり、2014年4月2日、地元の樹木医の立会いの下、生育上不要とされる懐枝(フトコロエダ)を貰い受けることが出来たのである。ただし条件が付いた。必ず生育したこの木には、地蔵久保の大山桜の子孫であることを明記することを書面で約束させられることとなったのである。その上で小生はこれを茨城県結城市にある『日本花の会』のさくら見本園に持ち込み、接木による繁殖を依頼したのである。

同様に福島県白河市の妙閑寺には、『乙姫桜』という八重咲で色の濃い枝垂桜がある。この木には継承木がなく、これを理由にして、一枝分けてほしいと交渉を続けたが、答えは「否」で許可はおろなかった。しかし地元はこの木の世話をしている方がいらっしゃるということで、その方を紹介してくださった。乙姫桜

の種子を播種して、この苗木を販売して、管理費に当てているということだったので、小生も白河までこの木を受け取りに行った。しかしサクラと思しき木が大きくなってくると、これはエノキで、新たに他の木と取り替えてもらったものの、これもサクラの近縁種で、乙姫桜の子孫とは程遠かった。しかしこの方は、小生が何度も足を運んだことに対して、小生の熱意に根負けしたのか、お寺のご住職に直接話してくださり、同じ年、乙姫桜の小枝を入手した。そしてこれも結城まで持参して、接木してもらい数本の苗木を造ることに成功したのである。

★ ★ ★ ★ ★

小生はここにいたるまで、サクラの追っかけを長いことやっていた。しかし乙姫桜は他の地では見たことのないほどの美しいサクラだった。伝説によれば伊達の殿様が徳川に献上するために3本の苗木を参勤交代の折に江戸へ運んで行ったが、白河でこの寺に参拝したとき、ご住職から強く所望されて、その1本をこの寺に奉納したものだと言われている。似たサクラは関越自動車道の松井田インターチェンジを下りた所に、樹齢60年ぐらいのものがあるが、同一品種かどうか定かではない。

小生がなぜ桜に執心しているかといえば、過日の大震災が根底にある。小生の心積もりとしては、この乙姫桜を増やして、5本を『白河城址公園』に、さらに5本を、日本で最初の公園である『南湖公園』に植えたかったのである。そしてさらに10数本を繁殖させて、今回の原発の被災地で、まだ帰宅が許されていない福島県の市町村へ1本ずつ植えて、町の復興のシンボルとして育ててほしいと考えていたのであった。この考えは、お寺の御住職にも、またさくら見本園の田中所長にも賛同していただくことが出来た。

★ ★ ★ ★ ★

こんな経緯があって、さくら見本園の所長からこの接木したサクラが出来たから、取りに来てほしいという連絡を受けたのは11月26日のことだった。明日は終日事務所に居るけれども、翌日の金曜日は出張が入っており、出来れば今週中に渡しておきたいということだったのである。

実は11月27日は小生の71回目の誕生日だった、小生は自分の誕生日には母親の墓参りに行くことにしている。小生を生んだときの苦しみに感謝するためである。ところが結城へ行くこととなり、ここで三毛猫に出会ったという次第である。この偶然は正直、何か運命を感じないではいられなかった。そこには天国の母からのメッセージがこめられているように思えた。母が小生に、この猫がやがて老いて亡くなるまで、「後15～18年、健康に気をつけて生きて行け。」と言っているように聞こえたのである。父が亡くなったのは75歳のときだったから、小生はあと5年ばかり生きれば十分だと考えていた。しかもちょうど14年前に佐久で拾ってきた猫ジュンも、ずいぶんと年老いてきている。人間で言えば恐らくもう小生とほぼ同じぐらいの年齢だろう。この猫もあと数年の寿命だろうから、コイツを看取ってから、

自分も死ねば、ちょうど父の死とも重なってくると考えていた(03-05-12)。

★ ★ ★ ★ ★

しかし三毛猫との出会いは、これを母から叱咤されたように思えてならなかった。ジュンは男の子で、ずっと小生と暮らしてきた。この三毛猫は女の子だしジュンのいい友達になるのではないかと、咄嗟に考えた。この猫はよほど空腹だったらしく、途中のコンビニで購入した缶詰をあっという間に平らげて、空き缶までかじり続けていた。それからかれこれ1年、不妊手術も無事に済んで、最初はジュンとの間で喧嘩が絶えなかったものの、今では14歳になったジュンと何とか円満に過ごしている。名前は桜にしようか結城にしようか悩んだすえ、結紀(ユキ=雪)に決めた。三毛とはいえほとんどが白色だったからである。

★ ★ ★ ★ ★

ジュンは長野県の佐久市の駒場公園で拾ったシャムネコとアメリカンショートとのハーフらしい。2001年6月3日に拾ったのでJuneとした。当時我が家にはもう1匹、どこからともなく庭にやってきて、エサをねだる猫がおり、これがいつの間にか家の中へあがりこんできて、すっかりなついていたので、1匹も2匹もそうそう変わらないかと思って拾って来た次第である。こちらの先輩野良もオス猫だったが、転勤族に捨てられてしまったのか、同じ年の4月初め頃から飼い始めていた。もうかなりの年のようだったが、なぜか声の出せない猫だった。先天的なものか、もとの飼い主に手術されて、声帯を取られてしまったものか定かではない。しかし去勢はされていなかったもので、多分先天的なものなのだろう。最初ジュンはこの猫となつかなくてしょっちゅうケンカをしていた。しかしこの猫は物静かで、おとなしく妙に礼儀正しいところがあったので、ハッピーと名づけた。法被(ハッピー)でもいいし、Happyでもいいと思っていたのである。不思議なことに道を歩くときは必ず右側を歩いた。7年間一緒に過ごしたが、小生が会社に行くときに同時に玄関を出て、帰るときには門前の駐車場の下で必ず小生の帰りを待っていてくれた。この話しは近所でもよく知られ、『忠猫ハッピー』といわれるほど有名になっていた(03-05-12)。

★ ★ ★ ★ ★

一方ジュンの方は外に出すことはなかった、以前飼っていた猫が、小生の出張中に門前で車にハネラレて死んだことで、小生は極端に猫が車にハネラレルことを警戒していたからである。このため休日にはいつも車に乗せて近所の公園まで散歩に行き、ここで思う存分遊ばせることにした。ジュンは木に上ったり、芝生の上を走り回ったり、他人にもよくなつた。車で外出するときは必ず一緒に出かけていた。長野県の戸隠神社、上高地、軽井沢、美ヶ原。岐阜県の高山、群馬県的水上、栃木県の日光や那須高原。福島県の須賀川、宮城県の仙台、埼玉県の秩父。そして千葉県の上野、京都の嵐山、徳島県の徳島。ともかく北は仙台から南は四国の徳島まで一緒にドライブして、ホテルにも宿泊したことがあった。リードを

付けなくても後を付いてきたし、車へも自分から乗り込む賢い猫だった。日本でもトップクラスのドライブ猫で、5万キロは走っただろうと思う。

★ ★ ★ ★ ★

その前にも猫を飼っていたことがあるが、これも拾ってきた猫だった。この猫は兄弟で5匹が一緒に捨てられていた。雨の降る夏至の日だった。1匹は雨にうたれたせいか、すっかり弱っていて間もなく息を引き取った。捨てられていた猫とはいえ、子猫の死は悲しかった、真っ黒の所謂カラス猫で福猫だった。畑の脇の梨畑の隅に葬った。そして残った4匹を連れて、スーパーマーケットの駐車場へ行き、通る人ごとに猫をもらってくれるよう頼んだ。4時から8時まで頑張っって声をかけた。3匹は何とか里親を見つけることが出来たが1匹だけが残った。この猫を車に乗せて家に帰った。母が存命中だったので動物嫌いの母には内緒にしていた。最初は飼うつもりはなかったが、一晩一緒にいて気が変わった。心が癒されるなんていう単純なものではなかった。新しい友達が出来たような気がした。自分の命の次に大事なものになった。このいわば売れ残りの猫は、最初に出会ったときから小生の後ろを付いてきた。逃げても逃げても追いかけてきた。5匹も拾って里親を見つけてやろうと思ったのも、コイツがいたからだったかも知れない。膝の上で、ゴロゴロと喉を鳴らした。一緒にテレビを見た。一緒に風呂に入った。トイレも一緒だった。人間のやることは何でもまねをした。まるで自分も人間であると信じているようだった。もちろん寝るときもベッドにあがってきた。それで、もうこの猫と離れられなくなってしまった。洋種の血が入っているようで、ブリーダーが純粋種でなかったために捨ててしまったものと思われた。哀れな雑種の猫である。母に見つからないように2階の風呂場に猫小屋を作って飼うことにした。母は高齢で2階には上がれなかったからである。この猫とはずいぶん一緒に公園へ散歩に行った。一緒に学校の庭を走った。はぐれることもなく付いてきた。よく肩に乗って来て、車の中でも町を歩くのも肩の上に居ることが多かった。5匹の兄弟だったのと、すぐ喉を鳴らすのでゴロと名づけた。太平洋を見に行つた。都心にも行つた。ちょっと目を離したすきに、赤坂のブティックに勝手に入って行ってしまったこともあった。どこへ行つても人気者だった。しかし小生が出張で数日留守にしたとき、門の前で車にハネラレて命を落とした。秋分の日だった。猫とめぐり合ってからちょうど太陽の4分の1を地球が周回したときだった。不思議な運命を感じた。ゴロは神話に出てくる太陽の神様からの使いだったのではないかと思えるほどだった。しかし無性に悲しかった。以来もう猫を飼うのはやめようとさえ思った(10-01-00 参照)。

★ ★ ★ ★ ★

日本では犬猫が年間で30万匹(平成19年内閣府特定NPO法人ConoasSのデータ)も殺処分されているのだという。ほとんどが人間の身勝手に捨てられたりしたことが原因である。小生には殺処分の話は、あまりにも心がいたんだ。

そして昔のことを思い出していた。

まだ小生が7歳か8歳だったころ、我が家の庭にメスの子犬が来るようになってエサをねだった。当時は戦後間もない頃で、やっとサツマイモばかりの食事から解放された時代である。それでも子犬は人間の食べ残したサツマイモを、よく食べていた。よほど空腹だったのだろう。小生はこの犬を可愛がってチビと名づけた。毎日この犬に会うのが楽しくて、給食を少し残して家に持って帰り、チビに与えた。しかし**当時は犬殺しといわれている職業があった時代である。**

★ ★ ★ ★ ★

いつかこのチビが首輪も狂犬病の予防注射もしていないという理由で、野良犬と見なされ、**犬殺しに捕まってしまった。**首を針金で出来た円形の捕獲道具で吊り上げられ、ヒョイツと檻に入れられてしまったのである。檻に入れられても、チビは小生が救い出してくれることを願っていたに違いない。しかしそれはまだ7～8歳だった子供の小生にはかなわなかった。哀しい目をして小生を見つめていた。小生は一生懸命この犬殺しの自転車を追いかけて、犬殺しのおじさんに「これは僕の犬だ！」と訴えた。「チビ!」「チビ!」と叫びながら追いかけた。しかし追いつくはずもなかった。泣いた。悲しくて仕方なかった。チビは殺されてしまう。だがどうすることも出来なかった。そのとき小生は大人になったら、こうした悲しい犬を救ってあげられるエライ人になりたいと思った。しかしやがて50年の歳月が流れ、チビのことはすっかり忘れてしまっていた。

★ ★ ★ ★ ★

しかし30万匹以上の殺処分の話を聞くたびに、**チビのことを思い出す。**そしてとめどなく涙が流れるときがある。あの時どうしてチビを救ってやれなかったか、**心が痛む。**人間と同様に命をもって生きている動物である。この地球上に生を受け、一生懸命に生きている。なぜ人間の身勝手に、やすやすと殺処分できるというのだ。人間は動物をブランド犬だからといって可愛がったり、雑種だからといって虐待したり、最後にはいわば邪魔だからという理由で命すら奪う。小生はこの人間の冷酷さに我慢が出来ない。以来、犬でも猫でも野良を見ると、つい拾って来てしまう。そして犬殺しの檻の中で小生を見つめながら、悲しそうな声を上げて、やがて見えなくなったチビのことを、昨日のこのように思い出す。

★ ★ ★ ★ ★

数年前、さいたま市浦和区で、厚生省の元事務次官夫婦が宅配便を装った男に殺害された。その動機は子供のころ、自分が可愛がっていた犬が保健所に連れて行かれて殺処分されたからだ、**とのことだった。**この殺人犯の気持ちは、同じ体験をした小生にも理解できる。人間にとって犬や猫は、時として友達以上に大切であることだってある。彼にとってもそうだったのだろう。

★ ★ ★ ★ ★

小生は垂直頸椎だったために背が丸く、子供の頃「セムシ」「セムシ」と虐められたために、よく悲しい目にあった。こんなときは猫と一緒に過ごしたことが多かった。猫は小生の心を癒してくれた。少なくともこのイジメのために死のうとは思わないで済んだ。当時飼っていたのはタマと名づけた白と茶色の猫だった。しかしこのタマは隣の金持ちの悪餓鬼に空気銃の的にされて、目の横を打たれた。少し血が流れたが間もなくカサブタになったので、空気銃で撃たれていることに気が付かなかった。気づいたのはポロリと弾が落ちたときである。しかしそれから間もなくタマは体調を崩した。小生の二人の姉と小遣いを出しあって、当時近所に出来たばかりの犬猫病院へ連れて行っただが、治療の甲斐もなく世を去った。亡骸を病院からつれて帰るとき、姉弟みんなで泣いた。タマの死因が、鉛毒のためだったことは後で分かった。この悪餓鬼も数年前に世を去って、今となってはもう遠い昔の話しに変わった。しかしこの男は小生の家のブロック塀に車を駐車場から出し入れした際に激突させて壊し、しかもダンマリを決め込んでいた。塀が傾いているのを見て小生が向かいの家の車を確認したときに、いつもと違う中古車が入っていたから、奥さんに正すとその晩、この男が現れて自動車修理工場の男がぶつけたのだと弁解する始末で、悪餓鬼は死ぬまで悪餓鬼だと、小生は妙に納得できたような気がした。

★ ★ ★ ★ ★

今は犬も猫もマンションでは飼えない。だから虐められた子供が犬や猫に心が癒されることも少なくなってしまうように思う。特に都会では。しかし人間もそして犬も猫もみんな地球規模で見れば、家族であり、相互に助け合って生きている。それぞれが一生懸命に生きている。それぞれの命を全うするためにエサを求めて、生きようとしている。だがしばしばその意志が人間によって損なわれてしまう。時には残酷すぎる形で処分される。まるでゴミくずと同じように。そしてその亡骸は焼却されて産業廃棄物とされてしまう。その動物達の命は誰からも顧みられることはない。小生はこれを何とか出来ないか考えるときがよくある。歳を取ったからかもしれない。しかしその一方で殺処分ランクのきわめて高い山口県では、殺処分ゼロを目指して里親の制度や、捨て犬等をなくす努力を続けているという。うれしい話ではある。

一方殺処分の最も高いのは四国で、持ち込まれた犬や猫は、ほとんどが何の努力もなくガス室へ送られるらしい。まるでかつてのナチスのような悲しい話である。

★ ★ ★ ★ ★

一方広島県神石高原町(ジンセキコウゲンチョウ)は、高原野菜と肉牛、そしてホテルの多い高原の街としてよく知られているのだが、この町では、広島県内の犬の殺処分ゼロを目指して、ピースウィンズ・ジャパンが運営する「ピースワンコ・ジャパン」プロジェクトが、懸命な活動を続けている。殺処分寸前の犬を引き取り、獣医師による健康診断や、ドッグトレーナーによるしつけをした

後、新しい飼い主を探しているというのだ。そして保護や譲渡するだけでなく、災害救助犬や、セラピー犬としての育成も行っており、地元の福祉施設を慰問して、老人にも愛される犬に育て上げているというのである。

★ ★ ★ ★ ★

さらにピースワンコ・ジャパンでは、2020年の東京オリンピックまでに日本の犬の殺処分をゼロにするという目標まで掲げている。このプロジェクトでは市場の犬に対するニーズや、どうしたら犬と親しんでもらえるかなど、様々な角度から研究分析を重ね、高齢者は子犬よりも成犬を希望するケースが多いところから、希望に合った成犬との見合いを勧めるなどの工夫も行っている。

こうした努力の結果、2014年8月20日に発生した広島土砂災害では、ピースウィンズ・ジャパンが育成した2頭の災害救助犬と、レスキューチームが出動して、大きな成果を残した。このうちの夢之丞(ユメノスケ)は、殺処分される2日前に保護された捨て犬だった。当初は臆病で人を怖がる子犬だったが、スタッフの厳しい訓練にもよく耐えて、災害救助犬となった。そして土砂災害発生初日、広島市安佐南区で捜索・救助活動に加わって、行方不明者1名を発見する手柄を立てたのである。夢之丞の活躍はメディアでも大きく報道されたため、ご存知の方も多かるうが、これをきっかけに「殺処分ゼロ」への支援もさらに広がっている。

そこでピースウィンズ・ジャパンは、本部がある広島県神石高原町と連携して、「ふるさと納税」を使って犬の「殺処分ゼロ」の活動を支援してゆく仕組みを開発し、ふるさと納税の申し込みの際に、使い道をピースワンコ・ジャパンの支援に指定することにより、ふるさと納税の制度が殺処分ゼロに生かされることとなった。

★ ★ ★ ★ ★

この神石高原町の試みは殺処分を抱えているすべての自治体の課題であり、動物を愛するすべての人々の関心事でもある。そして神石高原町は、ひとつの指標を全国へ提示した点で評価されるべきであろう。全国からの寄付金をもとに犬舎の建設や訓練士の確保など、犬と人間の調和がなされるなら、このシステムは経済的な効果さえも期待できるであろう。さらにオリンピックまでに日本中で殺処分ゼロを実現することを心から願ってやまない。



水戸商店街の看板猫、人気者の「ハチ」

ダ・ヴィンチニュースより借用しました。

ピースウィンズ・ジャパンは、現在、神奈川県藤沢市でも湘南T-SITEを立ち上げて、里親募集を行っている。この活動にも大いに期待したい。

ブランド犬だけが犬ではない。ブランド猫だけが猫でもない。茨城県水戸市で大切に育てられている『ハチ』は、ごくありふれた雑種である。だがその白と黒の模様が稀な形であり、更に背中にハート印を背負っていたため、多くの人を幸せに導いて人気者になっている。一方、わかやま電鉄貴志川線では、年老いた三毛猫タマが、人気者の駅長となり、乗客が増えて会社の経営を救った。



インターネット「ピースウィンズ・ジャパン」より借用させていただきました。

★ ★ ★ ★ ★

雑種犬だって野良犬だって、愛情をかけることで素晴らしい家族に成長する。動物は猫でも犬でも人間の愛情しだいで、いかようにも育つ。もし我々が幸せな家庭で、幸せな生涯を全うしたいと願うなら、まず家族で動物を飼って、子供に動物とのコミュニケーションを教えて、動物とよい友達になるところから始めるのが一番確実な方法ではないかと小生は考えている。動物を愛する少年に虐めっ子はいない。動物を愛する少年は、虐められてもきっと自分で立ち直ることが出来るだろう。人間と動物が心を共有できるようになるために必要なことは、唯一お互いの信頼関係の構築である。先進諸国はどここの国でも動物を大切にする習慣がある。こうした動物と人間との深い関係は、狩猟や牧畜を通じて学んできたのだろう。カナダの国立公園の観光道路には立体交差の地下道が設けられて、そこが獣道になっているという。日本でも江戸時代には「生類哀れみの令」なる法律が生まれた。とかく評判の悪い法ではあるが、これは多分、施行に当たっていた下級管理が、この法の精神を理解できずに、無闇やたらと取り締まったために、悪法とレッテルされたもののように思う。しかし以来、日本では動物に対しての意識が向上することはなかった。日本がここまで先進国化されながら、いまだに30万匹の犬猫が殺処分されていることに、小生は納得が行かない。国民の0.003%の人が、捨てられた犬や猫に対して、救いの手を差し伸べていただけたらと願うばかりである。そして日本人があらゆる点で、すべての命や、すべてのものに関して、ブランド嗜好から解放されることを願ってやまない。